

ニュースレター

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

巻頭言

「今を生きる若者に伝えたいこと」

所長 内藤幹子
Mikiko Naito

わたくしが所属する本学経営学部では、すべての専任教員が専門ゼミナールを担当しますので、毎年少ないながらも数名の学生が、経営学部の所属でありながら「キリスト教」の専門ゼミナールで2年半学び、卒業論文を書いて巣立ってゆきます。それぞれにかなり苦しみながらも、何かしら自身の関心のある分野を見つけ出してゆきますが、「他宗教との比較」「聖書を題材にした美術作品」「日本におけるキリシタン史」などかなり専門的な内容のものから、「冠婚葬祭」「ロックミュージック」「ファッション」などとキリスト教の接点を見つけ出し分析するようなものまで、様々なテーマ設定がなされますので、一緒にそれらを学ぶ中では新たな発見がたくさんあり、楽しいものです。



この3月に卒業したある学生は、「キリスト教が日本で広く信仰されない理由」と題した卒業論文に取り組みました。歴史的経緯、日本人のメンタリティーにおける特徴をはじめ、様々な「理由」が考えられていることを教えられましたが、ある調査によると日本人の10人に1人がキリスト教系の教育機関に学んだ経験を持つものの、いわゆる「オウム真理教」の事件（1995年）を契機に宗教全般が「危険なもの」「警戒すべきもの」として認識されるようになったこと、それにも関わらず、インターネットの発達等の条件も手伝い、いわゆる「カルト宗教」に魅了され取り込まれていく若者が後を絶たないこと、そのような現状と課題について改めて考えさせられる機会ともなりました。

関東学院大学のキリスト教教育においては、誤解や偏見を超えたところでキリスト教の指し示す真理や広い世界を紹介してゆく「知恵」が必要でしょう。また、人を不健全な在り方で支配し、人生を様々な形で貪り取ってゆく構造を見抜く「センス」を学生の内に養ってゆかねばならないでしょう。「キリスト教と文化研究所」が擁する多岐に渡った研究グループからも、多様な角度や切り口により、そのような教育に寄与する豊かな発信がなされています。この『ニュースレター』が2025年度も当研究所の活動を広くご紹介するために用いられてゆきますように。

活動紹介 「キリスト教保育を哲学する研究グループ」



「フレーベルを巡る現地調査」(2024年夏) 報告

熊田 凡子 (教育学部)
Namiko Kumata

本研究グループでは、キリスト教保育の歴史、および思想に関する人間学的教育学的研究を行っています。2024 年度の活動では、キリスト教保育思想の原理「現代の教育・保育におけるフレーベルの教育思想の教育的意義に関する研究」をテーマに、フレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1783-1852) の教育思想を巡る現地調査 (8 月：ドイツ・チューリンゲン地方) を行いました。

2024 年初旬に「ドイツのフレーベルの地に行けるかもしれないわ」と思わず発した私の一言が、研究会メンバーの菅原先生と小林先生、そしてフレーベル思想の研究家畠山祥正先生の内側に強く響いたようで、「“さあ、子どもたちに生きようではないか”(フレーベルのモットー)に向かいましょう」ということになり、春早々、フレーベルの生きた地を目指し渡航準備を開始しました。出発に至るまで様々なエピソードがありましたが、無事に出国、現地でフレーベル思想を十分に感じ、通底したキリスト教保育思想を再考する学びへと導かれました。以下、ドイツ滞在の報告 (8 月 16 日～23 日のうち 4 日間) をいたします。

8 月 17 日：バート・ブランケンブルクにて、フレーベルが開設したカイルハウ学園までの道のり (彼が行き来した道の一部) を歩き、グライフェンシュタイン城まで登りました。午後は、フレーベル博物館 (左記写真) の館内で数々の資料を閲覧し、その後フレーベル幼稚園を観察しました。自然と対話しながらフレーベルの教育思想 (生命の合一) の道を感じ、また彼の歴史に触れることで、あらためてフレーベル思想を考える時間となりました。なお、フレーベル博物館 (Fröbelmuseum) は、1839 年 7 月より「遊びと作業の教育所」(Spielund Beschäftigungsanstalt)、つまり当時の幼稚園としてフレーベルが保育者養成と幼児教育を実践した場所です。1982 年より現在の博物館となっています。

8 月 18 日：オーバーヴァイスバッハのフレーベルの生家・教会 (左記写真) 及び墓地 (父母の墓地) と博物館を訪問。教会で寂しい幼少期を過ごしたフレーベルは、洗礼盤のところ (右記写真) に隠れるように座っていたのではなかろうかということです。その後、生家・教会前の博物館を訪問し、フレーベルの考案した「恩物」に関する数々の史料をはじめ、これまでにフレーベル研究者たちが訪問し調査したことに関する資料などを閲覧しました。フレーベルの思想を感じ (フレーベルがそばにいたような感覚で)、彼の思想に浸りました。

フレーベルは、幼児期の発達において、「あらゆる善の源泉は遊戯にあり、また遊戯からあらわれてくる」とし、遊戯の重要性を主張しました。それは、フレーベルが、子どもは遊具で遊ぶことを通して、世界を法則的・調和的秩序が予感できると考えたからです。こうした考えを再考察することにつながりました。

8 月 19 日：カイルハウ学園とフレーベルの思索の地「フレーベル・ブリック」へ向かいました。途中ルードルシュタットの宮殿に立ち寄り、今回滞在したブランケンブルクをはじめドイツ・チューリンゲン地方を見渡しました。カイルハウ学園 (左記写真) は、1816 年グリースハイムで始められた一般ドイツ教育所で、翌年 7 月カイルハウへ移転しました。ここで、フレーベルは子どもたちとの生きた触れ合い、自然との共感、農作物栽培、庭づくり、動植物の観察、共同作業等の教育を実践したのです。

「教育、殊に教授は、人間をとりまいて自然に内在し、自然の本質を決定し、そしていつも変わらず自然の中に現れている神的なもの、精神的なもの、永遠的なものを、人間に直観させ、認識せしめなければならない。こんなわけで、教育は、教訓との生きいきとした交互作用で、また教訓と結びついて、同じ法則が自然と人間とを支配している事実を明らかにし、提示しなければならない。」(『人間の教育』より)

フレーベルは、このカイルハウと初日に私たちが訪れたブランケンブルク「幼稚園」(遊戯と作業の教育所) を行き来しました。その道を私たちが歩き登ります。頂にある「フレーベル・ブリック」が見えて来ました。私たちの足は、山登りに慣れたようでした。

フレーベル・ブリック (Fröbelblick) に到着 (Blick は「光景、眺め」などの意味)。カイルハウからブランケンブルクへ山越える途中のゲーリッツ (Görlitz 父祖の出身地) を見下ろす眺めのよい崖の上に、フレーベル考案遊具である第二恩物の大きな記念碑 (左記写真) があり、「この景観を前にして、フリードリヒ・フレーベルは、幼稚園 Kindergarten の名称を思いついた」と刻まれています。

なお、「恩物」とは、虹の色のうちの 6 色からなる六つのボールの第一恩物、木製の球・円柱・立方体からなる第二恩物、八つの立方体の集合である第三恩物などがあります。フレーベルはとりわけ球形を「万物の似姿」として、生命の象徴とみなし重視しました。

8 月 20 日：フレーベルの墓地、シュヴァイナ墓地を訪問しました。その途中、マリーエンタール宮殿 (フレーベル終焉の地) (左記写真) を外観しました。その後、約 2Km 歩き、シュヴァイナ墓地に到着し、フレーベル墓 (右記写真) を伺いました。

以上、本研究グループのフレーベル思想を感得するドイツ滞在が守られましたことを神様に感謝し、今回の現地調査をご指導・引率くださった畠山祥正先生と恵美子夫人に心よりお礼を申し上げます。

フレーベルの考えは、キリスト教汎神論ではなく、世界は神によって創造された被造物として、創造者と被造物との間に区別を置き、神の人格性と超越性が肯定される立場で、常に神の中に神と共にあるところの敬虔な生命を見つめていたのではなかろうか。今後、フレーベル教育思想の再考を深めていきたいと思ひます。

(熊田凡子) (写真筆者撮影)



バート・ブランケンブルクの眺め



カイルハウ学園



第二恩物の大きな記念碑



フレーベル研究者たちと共に



フレーベル博物館内



墓地から見える教会



フレーベルが歩いた道
自然との対話が続きます



洗礼盤：ここに座っていたのだろうか。



博物館内フレーベル像



フレーベル終焉の地



フレーベル墓

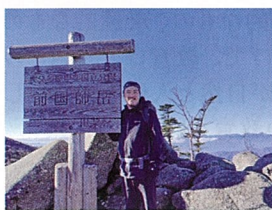
所員紹介



本沢 彩 (建築・環境学部)

Aya Motozawa

建築・環境学部共通科目で英語を担当しております、本沢彩(もとざわ あや)と申します。専門は英語音声学です。ネイティブらしさや外国人っぽさ、流暢さなどの、発音から人が主観的に感じる「らしさ」に興味を持って研究活動を行っています。私は本学旧文学部英語英米文学科(現国際文化学部英語文化学科)の卒業生で、学生の時には元学院長の森島牧人先生の教えるキリスト教学の授業を受けておりました。関東学院大学では、学生たちが大学での様々な活動を通じて「キリスト教の精神に基づき、生涯をかけて教養を培う人間形成に努め、人のため、社会のため、人類のために尽くすことを通して己の人格を磨く」という生き方を学んでいきます。授業で教えている学生たちが、「初めてのことが多くてキリスト教学の授業は覚えることがたくさん!」とか「礼拝のレポートって何を書いたらいいの?」とか言っているのを見ていると、ちょっとは成長できたのかもと感じます。学生時代に学んだことを少しでも後輩たちに伝えられるよう、キリスト教と文化研究所でさらに多くのことを学ばせていただければと思っています。そして、後輩たちと共に私もさらに成長したいです。



「山梨県 前国師岳の登山」

千 錫烈 (社会学部)

Suzuretsu Sen

大学教員になるまでは、私はキリスト教とはほぼ無縁の人生を送ってきました。しかし、私が着任した山梨英和大学(2010年～2011年)、盛岡大学(2011年～2014年)、そして関東学院大学(2014年～現在)は、いずれもキリスト教主義の大学であり、人生の半ばからのキリスト教との巡り合わせに感慨深いものを感じています。山梨英和大学と盛岡大学では、一般教員もチャペルアワーで講話をするので、聖書を手に取り、その内容を熟考する機会が何度もありました。そこで私の心に深く響いたのが、マルコによる福音書13章14節の「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら一読者は悟れ—、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい」という言葉です。

この言葉は、苦しく辛い状況に必ずしも立ち向かったり耐え忍ぶ必要はなく、時には逃げることも許されるのだと教えてくれました。そして、「山に逃げなさい」という言葉は、まさに私が唯一の趣味である登山と重なるのです。現実逃避を求めて山に登ると、麓からは決して見ることでできない山頂の雄大な景色は、日々の悩みが些細なものであることに気づき、再び困難に立ち向かう力を与えてくれます。

逃げることは、決して弱さの証ではありません。時には、立ち止まり、視点を変えることで、新たな道が見えてくる。山に逃げることで得られる心の安らぎと力は、私にとって明日への活力となっています。



田崎 達明 (栄養学部)

Tatsuki Tasaki

2025年度4月よりキリスト教と文化研究所の所員に任ぜられました栄養学部管理栄養学科の田崎達明です。

専門分野は、食品衛生学、微生物学及び食品衛生関連の実験を担当させて頂いております。具体的には、食品に関連する食品媒介感染症(食中毒)や添加物・残留農薬、あるいは寄生虫、ウイルスやその他の病原体等について担当させて頂いております。

さて、2024年度(2025年3月2日)も管理栄養士の国家試験が実施されました。一教員として、受験生全員の合格を心から願っています。

3月末には合格発表があり、毎年のことになりますが、その結果に一喜一憂してしまいます。

国家試験終了後、卒業生は管理栄養士として病院に、あるいは学校給食栄養士や調理担当として4月からそれぞれの勤務地へ新たな第一歩を踏み出します。

人間社会において、もっぱら技術や知識だけを追求するのではなく、人物も重要であることはいうまでもありません。本学の校訓である「人になれ 奉仕せよ」は、社会に貢献できる志を常に持ち、自己研鑽を重ね技術力を持った人材を育成し・輩出することにつながっていると考えます。

この度、キリスト教について改めて学ぶ機会を与えて頂き感謝申し上げます。今後、一層の理解を深めてまいりたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL: 045-786-7873 (研究所直通・月～金9:30～17:00)

FAX: 045-786-7806 (研究所直通・24時間受付)

発行者: 内藤 幹子

Director: Mikiko Naito